瞋恚の炎

幻妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
瞋恚の炎

【Ｎコード】
Ｎ０８７２Ｚ

【作者名】
幻妖

【あらすじ】
『瞋恚の炎（旧バージョン）』のリメイク版です。
（すいません、あらすじは適宜更新ということで…。今書くとネタバレになる…）

霧島仁と衣笠茜（前書き）

では、リメイク版をお楽しみください。
旧バージョンと比較して、どれだけ文章力が上がったのか調べるのもいいと思います。
けど、あまりお勧めはしない。ネタバレを嫌う人には特に。

霧島仁と衣笠茜

僕たちは、なんということはなしに日々の生活を送っていた。

しかし、僕たちが生きているこの日常（せかい）はとても儚く、そしてとても脆いものだった。

簡単に壊れてしまう、そんな代物だったのだ。

そのことに気付いている人は一体どれだけいたのだろうか。…恐らく殆どいなかっただろう。

あの日、あの場所で楽しそうに笑っていた人たちの中には。

そして、僕がそれまで生きてきていた日常は……壊れた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

…目が覚めた。が十分に寝た訳ではない。昨日は夜遅くまでゲームをしてたから。

なら…俺は何故目が覚めたのか？…簡単なことだ。感じたのだ、気配を。

そう、俺の部屋へと真っ直ぐに向かってくる奴がいた。

この家でこんなことをしてくる奴を、俺は一人しか知らない。

俺は息を殺し、感覚を研ぎ澄ませる………。そして、奴の動きを……掴んだ。

奴は音を立てないよう細心の注意を払いながら、しかしそれでいて着実に俺の部屋へと歩みを進めていた。ヒタリ…ヒタリ…とする筈のない音が聞こえて来るような錯覚を覚える。

そして、俺の部屋の前にたどり着くとそのまま動かなくなった。…中の様子を探っているのだろうか。

しばらくすると、静かに障子が開かれ、人影が俺の部屋の中に滑り込んできた。

それに対し、俺は薄目を開け、そいつの動きを注意深く観察する。

何が起きても即座に反応できるように。

そんな風に書かれると、嘘だー、とか思う人もいるだろう。俺も話

だけ聞かされたら信じない自信がある。しかし、俺は長年の経験から知っている。奴はどんなことでもしてくるのだ。
そんなことを考えている内に奴は俺の布団の真横に立っていた。そして、無言で片足を垂直に振り上げた。

「……！！！！？？」

ゾクリ…！！
背中を悪寒が走る。あの構えから放たれる技など一つしか存在しない。そして、その技を喰らった時、俺が歩む運命は……死！！！！
反射的に奴の残った足を腕で払うと、盛大にひっくり返り、起きてるなら起きてるって言えーーーっ、などと叫び始めた。
恐らく、俺の行動があとコンマ数秒遅ければ、俺の部屋は映像では見せることの出来ないような阿鼻叫喚の地獄絵と化していただろう…。
そう思うと謝る気も失せたので、未だに叫び続けている奴を尻目に立ち上がる。
さて、自己紹介が遅れたな。俺の名前は霧島仁（きりしまじん）。１７歳。
身長は１６９ｃｍ。１７０ｃｍに今一歩届かないこの身長が、俺は嫌いだ。
好きな言葉は「漢（オトコ）のロマン」。なんかカッコイイじゃん、響き的に。
特技は…そうだな…これを特技と呼んでいいのかはいささか疑問の余地があるが…俺は人の気配にはかなり敏感だ。
それは、さっきのやり取りを見てくれれば分かってくれるだろう。
…で。今、ひっくり返った状態のまま俺を睨み上げているこいつが衣笠茜（きぬがさあかね）。
朝の起こしかたにかなり問題点はあるものの、根はそんなに悪い奴じゃない。何かと面倒見もいいし。
「全く…。アンタの気配察知能力、最近異常じゃない？その内、人

ごみで吐くわよ…？」

「大丈夫だよ。なんか知らんが、人が多い所じゃうまく機能(はたらかない)しないんだ。全く…都合がいいのか悪いのか…」

そんな軽口を叩き合いながら、居間へと向かう。そこには先客がいた。

「おはよう、おじいちゃん」「おーっす、じじぃ」

「うむ」

俺と茜の挨拶に、そう一言だけ答えたのは衣笠道元(どうげん)。茜の祖父にして、俺にとっては父親代わりの存在だ。

さて、ここで俺と茜を取り巻く状況を説明しておこうと思う。

まず、俺には両親がいない。

１０年前の遊園地での大火事で二人とも死んだ。……いや、俺だけが生き残った。

しかし、どういう訳かその日の記憶はかなりあやふやだ。何があったのか全く覚えていない。

…いや、体は覚えているのだろう…。たまに夢を見るから。辺り一面が真っ赤に染まり、そして熱い、そんな夢を。

話を戻そう。…で、孤児となった俺を引き取ってくれたのが、古くから面識もあり、家族ぐるみでお付き合いをしていた、この衣笠の家だった。

そして茜。こいつの両親もすでに他界している。…俺が９歳の時だった。交通事故だった。

それ以来、じじぃは一人で俺と茜を育てている。今は俺も茜もバイトをして少しは負担を減らしているが。

以上、状況説明終わり。

「そういえば、おじいちゃん。仁の気配察知能力がまた発達してるのよ。多分、身体能力も上がってるんじゃないかって思うんだけど…」

朝飯を食べながら茜が話している。
余談だが、衣笠家の料理は全て茜が担当している。本人曰はく、「和食が一番得意らしい」が他の料理も十分美味い。

「……そうか……。仁、今度また手合わせをせ、」

「おい。じじぃとのバトル展開なんざ誰も期待してねぇよ、全く……。ごちそーさん！」

じじぃとの戦闘を回避すべく、かなり強引に話を切り上げる。
そのまま部屋に戻り鞄を引っ掴み、再び居間へ戻る。

「茜ぇ、さっさとしろーー！置いてくぞーーー！」

「ちょっ……！アンタ早すぎ…。ちょ、ちょっと待って……」

既に玄関で待機している俺の耳に、カチャカチャと陶器の触れ合う音がする。急いで片付けてるのか…。ちょっと悪いことしちまったな…。
しばらく待っていると少し息をきらせながら、茜がやって来た。

「ご、ごめんごめん……。じゃ、行こっか」

「おう」

二人揃って家を出る。さて、今日も一日平和でありますように……。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

二人が出て行き、家には道元だけが残された。

しばらくくつろいだ後に縁側に立って空を見上げる。彼の脳裏に浮かんだのは、つい先程の茜の言葉。

「………何か、嫌な予感がするのう……。何事も起こらなければいいが……」

彼が静かに呟いたその声は、誰にも聞かれることなく空へとゆっくりと溶けて行った……。

霧島仁と衣笠茜（後書き）

始まりました！『瞋恚の炎』。！

さあ、感想、じゃんじゃん待ってますよ！！

友人と妙なカリスマ性（前書き）

途中、滅茶苦茶読むのに苦労するかもしれませんが、頑張って下さい。
ちなみに、旧バージョンにはないエピソードです。

友人と妙なカリスマ性

学校へと向かっていると、途中で見知った顔を見つけた。

「おーっす、二人とも―！」

俺の声が聞こえたのだろう、二人がこちらを振り返る。

「おはよう、仁、衣笠さん」

こいつは神田(かんだ)善樹(よしき)。俺が付き合ってる奴らの中で一番マトモな人間。

ちなみに弓道部の部長を務めていたりする。

言い忘れていたので、今のうちに言っておこう。茜は剣道部に、俺は帰宅部に所属している。

「お！今日も夫婦揃っての登こ、（ガスッ！！）ギャアアァアァアァアア！！（泣）」

で、今アホ発言をしたおかげで吹っ飛んで行ったのが木島亮(きじまりょう)。

え？なんで吹っ飛んで行ったのかって？ハハ、簡単なことさ。茜が背後からドロップキックを喰らわせたのだ。

道端の茂みに頭を突っ込んだままの木島に呆れ顔で神田が言う。

「……いい加減に懲りたら、亮？」

「あの二人ってからかうのは面白いんだがな……。少し自重すっか……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

さて、授業風景など俺が覚えている訳がな、…ゲフンゲフン！…書いてもつまらないので割愛する。

という訳で、今はＨＲ(ホームルーム)の時間。議題は……文化祭のクラス企画について……か。

あ゛～、文化祭か～。またバイトのシフト変更してもらわんと……。

そんなことをうだうだと考えていると、耳を疑うような言葉が聞こえてきた。

「…………は霧島仁に決定しました！！」

それはまぎれもなく委員長である茜の声。そしてその後に聞こえて

きたのは湧き上がる拍手の音。
……ちょっと待て。何故俺の名が呼ばれた！！？？そう思って顔を上げると、黒板にはこう書かれていた。

『1年3組　文化祭クラス企画役員

主任：衣笠茜
副主任：霧島仁　　』

「茜えええええええええええ！！お前、一体、なにしてやがるうううううううう！！」
しかし、この俺の叫び(シャウト)も茜の前では無力に等しかった。
「うっさい！授業さえまともに聞いてないアンタに発言権はない！黙って引き受けなさい！！」
そのやり取りを聞いたクラスメートの笑い。それで俺の心はへし折れた。
「不条理だ……」
泣きながら机に突っ伏す俺。そんな俺に茜が話を続ける。
「アンタの仕事は、クラスの総意を汲んでクラス企画で何をするか決めること。いいわね？」
そう言われた瞬間、俺の頭の中で何かが引っ掛かった。…何が引っ掛かった？考えろ…考えろ……！！
そして、一つの結論に達した時、俺は無意識の内に立ち上がっていた。
なるほどな…そうか、そういうことか…。く……くく……くはははははははははははははははは！！

今から俺は…このクラスの神となる！！茜よ…俺を副主任にしたこと、後悔するがいい！！
教壇の上に立ち、ゆっくりとクラス全体を見渡す。俺の尋常でない様子に若干引き気味のクラスメートたち。
しばらくしてから、俺は彼らに一言、宣言した。

「このクラスの出し物は……決まった」

騒然とし始めるクラスメートたち。そんな中、一人の男が手を挙げた。
「ほう…面白い。言ってみろよ、仁。お前の、その考えとやらを」
発言者は木島。うん、持つべきものは友だ。俺が思った通りに相槌を打ってくれる。
「ああ……俺たちのクラス企画は……これだ！！」
そう言って黒板を叩く。そこには、いつ書かれたのか分からない六文字の言葉が記されていた。
『コスプレ喫茶』
再び騒ぎ始めるクラスメートを静める。
一人だけ、凄まじい殺気を込めた目で俺を見ている奴がいるが華麗にスルーする。今、あいつの額に青筋がビキビキと浮かんだ気がするが、多分気にしたら負けだ。
「さて男子諸君、全ての男が追い求めるものとは一体何だ！分かるか？分からないかそうかそれは仕方がないな俺が教えてやろう！それは……『萌え』だ！！こら、そこ赤くなるな！下を向くな！恥ずかしがるな！女子に白い目で見られるのがイヤだと？それがどうした！女の目など気にして人生が楽しい筈ねぇだろ！安心しろ、俺が保証してやる！男は皆、すべからく変態！！そしてそれは人間如き矮小な生物がいくらあがいてみせたところで覆すことなど出来ない絶対的事実！何？どこに安心すればいいか分からないだと！？なぜこんなことが分からん！お前ら、自分の周りをよ～く見てみろ！

そこにいるのは皆同士なのだ！これだけの同士がいて、何故女子が怖い！怖い筈がないだろ！さあ立ち上がれ同士諸君よ！もう君たちに怖いものなどない！！俺たちの妄想を爆発させるのだあぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！…では、何故『コスプレ喫茶』なのか！簡単なことだ！『コスプレ喫茶』こそ、俺たちの妄想をこの現実世界に最も引き出すことが出来るからに他ならない！！おいお前ら考えてもみろ！衣笠や吉野たち女子軍団がだ！メイド服ナース服チャイナ服セーラー服和服制服スクール水着ビキニチアガール巫女服修道服ｅｔｃ．ｅｔｃ．に身を包みお出迎え！さらに注文まで取り運んできてくれる！おい、これでまだ反論がある奴はいるか！…いないな、よし！行くぞお前ら！ここに！俺たちの楽園を！この手で築き上げるのだあぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁあぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

「「「「サーイエッサーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」」」

さて…男子はこれでいい。次は……

「さて女子諸君！…って待て、モノは投げるな！投げるなって…痛てっ！ちょっ…バットはやめろ、バットはあぁぁぁぁぁ……って話を聞けえぇぇぇぇぇぇぇぇえええぇぇぇぇぇ！！！！！」

ここまで叫んでやっと投擲がおさまった。…って誰だよ、鋏とかカッター投げたの…。しかし、そんなことを気にしていてもしょうがない。女子軍団の説得が先だ。

「君たちには好きな人の一人や二人いるだろう？勿論、このクラスかどうかなんて問わん！では考えてみるんだ！その好きな男子が君たちを執事服でお出迎え！そして『お帰りなさいませ、お嬢様』の一言！その後は言わずとも分かるだろう！…何？好きな人などいない？そうか、なら…奴を見ろ！奴の名は神田善樹！腐女子のみんななら分かるだろう！奴は……男の娘！さあ、想像せよ！奴がメイド服に身を包みお出迎えを以下略！！どうだ素晴らしいだろう！！俺のだしたこの企画なら、こんな夢みたいな話が全て実現できるのだ

！！これでもまだ反対する人はいるか！いないな！さあ、自らの欲望に忠実になって、皆でこのクラスを！楽園（パラダイス）に変えるぞおおぉぉぉぉおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！！！！」

「「「「はいっ！！！！！！」」」」

「うん、このクラスの皆なら絶対に理解してくれるって信じてた。…君たちが馬鹿（クラスメート）ばかりで助かったよ。特に木島、お前の事さ」

クラス中から沸き起こる拍手。それを聞いてやっと達成感を味わえた。…それにしても疲れたな…。さて、最後に…。

「さあ、採決の時間だ。『コスプレ喫茶』に反対の者は挙手を………はい、反対は衣笠茜のみ！よって！我がクラスの企画は『コスプレ喫茶』に決定した！！！！」

「「「「イエーーーーーーイ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」」」

そして、俺は気絶した。…完全なオーバーヒートだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

さて、後日談を一つ。

オーバーヒートして気絶した俺が目を覚ましたのは既に夕方だった。

太陽が沈みつつあるのが見える。

さて、帰るか…。そう思って立ち上がろうとしたが、体が全く動かない。見てみると、両手両足胴回りがしっかりと縛られている。

自分の身に何が起こったのか分からないまま、何とか抜け出そうと躍起になっていたその時だった。

ヒュンッ！！という風切り音がし、直後、俺の耳元で土が爆（は）ぜた。

は？………これは………弓矢！！？？ま、まさか………。

急いで矢が飛んできたと思われる方向を見ると、そこには次の矢をつがえようとしている神田の姿があった。

「………か、かかかかか神田君？き、きき君は一体何をし、」

「決まってるじゃないか、仁。処刑だよ、しょ・け・い★」

ほ、星が黒い！！！！？？？？

「お、おおお落ちつけ神田！話し合えば分か、…ヒィッ！！！」

ビスッ！！再び俺の近くに弓矢が突き刺さる。
「あはははははははは。クタバレ」
薄暗くなりつつある夕焼け空に俺の断末魔が響いていったのだった。

友人と妙なカリスマ性（後書き）

仁「ぜーぜー」

茜「おかえりー。…？どうしたの？」

仁「か、神田に殺されかけた…」

茜「自業自得ね。…あ、アンタの晩飯ないから」

仁「……ＯＴＬ」

肝試しと寂れたお堂（前書き）

やっと第3話が更新できました…。
時間がかかったねぇ…。パソ使える時間が減ったうえに、テストですよ…。
冬休みもそこまでパソ使えるとは限らないし…。
ま、元々不定期更新だと明言してるからいいんですけどね…。

肝試しと寂れたお堂

「こんちはー、おじさん、おばさん！」
「おう、来たか！んじゃ、今日も頼むよ！」
「はい！」
いつも通りの挨拶を済ませ、受け取ったエプロンを身に着ける。
ビール瓶がぎっしりと詰まったビールケースを次々と運んでいく。
その際に腕にかかるずっしりとした重み、額に滲む汗、そして何よりこの充実感！
うん、まさに漢（オトコ）のロマン！！…ちなみに“ロマン”は漢字だと“浪漫”。以上、ムダ知識でした。
さて、お気づきの人も多いだろうが、俺は今バイト中だ。
何？分からなかった？それは君がバカだか、…嘘、嘘だから！！俺の言い方が悪かっただけですスイマセン！！
…話をもどそう。バイト先は「木島酒屋」という酒屋。何を隠そう、木島の家だ。
さらに言えば、俺のすぐ傍では木島も働いている。
バイト中にとりたてて変わったこともなく、文化祭によるシフト変更もつつがなく済んだ。
そして、よし帰ろう、とした矢先に木島に誘われたのだ。「肝試しに行かないか」と。
…肝試しって言ったら普通夏にするじゃん、今はもう秋だよ？何で今更…。
そんなことを内心では思いつつも、深く考えずに了承する俺。
この時の俺は知らなかった。この選択肢を選んでしまったことで、再び俺の日常が崩壊してしまうことを…。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
時は過ぎ、時刻は既に午後１１時３０分をまわった。
衣笠家の消灯時間はどんなに遅くても午後１０時３０分。二人は既

に眠った筈だ。
木島（アイツ）とは午前０時に校門前で落ち合う予定だ。…そろそろ出るとするか。
先日の茜よろしく、気配を殺して玄関を目指す。そして、無事に脱出した。
「～～～～～～～～～～！！」
少し肌寒い空気を、胸いっぱいに吸い込むと、心地よい冷たさが身体中に染み渡る。
おし、準備完了。さあ、出発だ。

俺が校門の前に着いた時には、既に木島と神田は到着して…い……た……って神田！？
何で神田がここにいるんだ！？
「ああ…亮に誘われたんだよ。『仁も来るからお前も来い』って」
「ほう、神田まで呼ぶとは…。木島、お前どれだけ怖がってるんだよ！！」
小声で叫びながら木島に跳び蹴りを喰らわせる。吹っ飛んでいく木島。
そのまま踵を返して帰ろうとした俺を引き止めたのは…神田だった。
「ま、まぁ仁……折角だし行ってみようよ、肝試し」
正直に言おう、驚いた。
神田はどちらかと言えば、深夜の肝試（こういうこと）しは止めに入る側の人間だと思っていたからな。
そう言うと、苦笑する神田。
「うん……そうかもね。それに僕、肝試し苦手だし。……けど、今回は学校外で仁たちとバカ出来る貴重なチャンスなんだよ？こんな面白イベント、逃す手はないじゃん」
…全く……持つべきものは友だ、とはよく言ったものだな。こんな

友人を持てたことを俺は誇りに思うよ。ここは神田(しんゆう)の顔を立てるとしよう。そう考え直し、木島を茂みから引きずり出す。
「痛(い)つつつ…助かったよ、善樹……ってあれ？仁！？」
「悪かったな、神田じゃなくて。…ったく…。行くならさっさと行こうぜ！」
「「おおーーー！！」」

ザクザクと落ち葉を踏みしめながら踏みしめながら、俺たちは歩いていた。校門から出発し、そのまま裏山へと直行したのだ。
…裏山があるなんてどんだけ田舎なんだよって思ったやつ！この町は決して田舎なんかじゃないぞ。自然が他の町より少し…いや、たくさん残っているだけだ！
…それを田舎というんだよ…だと？うるさい、うるさい、うるさーーーい！！
さて、裏山に入ってから15分ほど経った頃、やっと木島が足を止めた。そして一言。
「ここだ」
その言葉を聞き、安堵する俺と神田。しかし、目の前のそれを見た瞬間、俺たちの顔が引きつった。
「…おい、木島…」「ま、まさか…ここ…！？」
俺たちの問いに満足気に首肯する木島。
俺たちの目の前にあったもの…それはお堂だった。
手入れをされなくなって久しいのだろう。妙におどろおどろしい。
うん、木島がビビってたのも分かるわ。肝試しの域なぞ、とっくに突破しちまってるじゃねーか。
俺も一人なら絶対に来ないだろう…ってか来たくない。
さて…木島(あのバカ)はここで俺たちに何をさせるつもりなんだ…？
「…で、亮。ここでどんな肝試しをするつもりだったの？」

俺が聞く前に神田が聞いた。
「あのお堂の入り口にはお札が結構貼ってあるんだよ」
ふむふむ…それで？
「それを一人一枚ずつ剥がしてくる！」
なるほどな……っておい！何だ、そのお題は！罰当たりすぎるわ！
…ってか入口まで行ったのか、このバカは！…そして神田！納得しちゃダメだろーーー！！
なんかツッコみ所が多すぎて困るのだが……まず第一には…、
「なぁ。それ、…誰から行くんだ？」
その言葉を俺が発した瞬間、場の空気が凍りついた。…誰も考えてなかったんかい！
…結局、誰が行くのを決めるだけで軽く1時間以上費やしてしまったことだけは補足しておく。

肝試しと寂れたお堂（後書き）

ああーーーーー！！
まだあと一日テストがあるんだよ！！
勉強しねーと……！！
ってな訳でサバラ！！…違った、サラバ！！

木島「そういやさぁ…」

…テスト勉強…。ま、いっか。で、何？

木島「次回予告ってしねーの？」

…ああ、しない。ってか出来ない。考えてないもん。
いや、考えてはいるけど、次回予告はメンド…いや、しない方が読者も期待できるじゃん。

木島「さいで。…皆さん、感想も待ってます！！では」

アデュー！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0872z/

瞋恚の炎

2011年12月11日01時50分発行